

394 膀胱瘤、子宮脱に対するTVT手術併用前腔壁形成術の有用性の検討

大阪大

太田行信, 古山将康, 陳 日華, 富家真理, 楠井千賀, 竹村昌彦, 下屋浩一郎, 東 千尋, 村田雄二

【目的】性器脱の外科治療では泌尿器, 生殖器機能の回復は重要な課題である. 本邦では子宮脱に対して腔式子宮全摘, 前後腔壁縫縮を中心とした手術法が従来施行されてきたが, 術後に腹圧性尿失禁の出現, 再発, 増悪する場合が多い. 腹圧性尿失禁に対するTVT (Tension-free Vaginal Tape) 手術は有効性の高いスリング術式であるが, 局所麻酔下で咳による尿噴出が停止する点を目安としてテープを固定するため, 一般的には子宮脱手術と同時に施行されない. 本研究では膀胱瘤, 子宮脱の患者に対し, 子宮脱の矯正術とTVT手術併用前腔壁形成術を同時に行い, 排尿機能に対する有効性を検討した.

【方法】対象は6例(子宮脱5例, 子宮脱手術後腔脱1例)で, 術前尿失禁を3例に, 排尿困難を3例に認めた. 全身麻酔下で, 子宮脱に対し腔式子宮全摘出術後, McCall改良法, Inmon法によって腔尖部を固定し, 前腔壁形成術ではKelly法および恥頭筋膜を正中縫合後, TVT手術を行った. また子宮摘出後の腔脱に対してはInmon法, Kelly縫合施行後, TVT手術を行った. TVTは外尿道口から2cm離れた前腔壁に1.5cmの正中縦切開を加えて腔壁と尿道を剥離し, 独自に開発した補助具を用い, 外尿道口下縁と坐骨棘を結ぶ線上に中部尿道が位置するように固定した.

【成績】術後1週間膀胱内にカテーテルを留置し, カテーテル抜去後の排尿では6例全例腹圧性尿失禁, 排尿困難を認めず, 3日目までに残尿も消失した. いずれの症例も術後の鎖膀胱造影にて尿道, 膀胱は生理的な解剖学的位置に矯正された. 最長10ヶ月間外来フォローされているが経過良好である.

【結論】膀胱瘤, 子宮脱に対するTVT手術併用前腔壁形成術は排尿機能回復に有効である.

395 尿道過可動を伴う膀胱瘤に対する後恥骨式傍腔壁形成術の治療成績

兵庫県立西宮病院

木村俊夫, 飯島隆史, 中辻友希, 伊藤公彦, 信永敏克

【目的】性器脱, 特に膀胱瘤の手術において, 術後にしばしば尿失禁の起きることは欧米ではよく知られた事実である. 今回, 術前に尿道過可動を伴う膀胱瘤に対し, 前腔壁縫縮術等に加え, 術後の尿失禁予防の目的で後恥骨式傍腔壁形成術を施行した.

【方法】性器脱を主訴の患者の内, 術前診断で, lateral defectによる尿道過可動を伴う膀胱瘤に対し, 膀胱瘤の形成術(前腔壁縫縮術や傍腔壁形成術など)に加え, 後恥骨式傍腔壁形成術を施行し, 術後2年以上を経過した7症例について検討した.

【成績】術前の症状として, 7例すべてに下垂の自覚と共に排尿困難が認められたが, 尿失禁の自覚は4例のみで, その内2例は性器脱の増強に伴い尿失禁は消失していた. 術後2年の時点では, 全例, 下垂感, 排尿困難の消失を認め, 1例のみ軽度の尿失禁が認められた. しかし, 診察上, 膀胱瘤は2度1例, 1度4例の再下垂を認めた.

【結論】後恥骨式傍腔壁形成術は, 尿道過可動を伴う膀胱瘤に対し, 術後尿失禁の予防には効果を認めた. しかし, 膀胱瘤の再下垂には, 慎重な術式の選択が必要と考えられた.

396 急性腹症で発症し, uterus like mass と診断した二例

公立三次中央病院

島筒里香子, 平田正人, 赤木武文

uterus like mass は病理組織で子宮と同じ層構造を有する腫瘍である. 今回我々は急性腹症で発症し, uterus like mass と診断した二症例を経験したので報告する. 一例目は25歳女性, 月経困難症と双角子宮を指摘されていた. 月経中の右下腹部痛にて来院し, 超音波にて子宮の右側に連続している腫瘍があり, 内腔に直径2cmの出血像が認められた. 双角子宮の右側の内腔が閉塞, 月経血の貯留による痛みを疑い子宮内膜全面搔爬術を施行したが, 超音波で見られる右側の腔にはゾンデは入らずまた, 痛みが治まらなかったため, 硬膜外麻酔にて鎮痛し, 退院した. その後再び右下腹部痛で入院, 硬膜外麻酔で鎮痛をはかったが下腹部痛続き, MRI, 子宮卵管造影で腫瘍は子宮筋層内腫瘍と診断したため, 緊急手術を施行した. 摘出腫瘍は病理所見にて平滑筋壁の中央部に内膜組織に覆われた内腔があり, uterus like mass と診断された. 術後, 下腹部痛は軽快し, 退院した. 二例目は47歳女性, 左下腹部痛にて来院し, 超音波にて子宮の左側に直径4cmの腫瘍を認めた. 内服で痛みが治まらず, 腫瘍摘出術施行した. 一例目と同様に摘出物は病理所見にて uterus like mass と診断された. 術後下腹部痛は軽快した. これらの症例より, 急性腹症の鑑別診断として本症も考慮することは有意義なことと思われた.